

私がなぜ現在の科目を選んだか

「皮膚科」

信州大学医学部皮膚科学教室

佐野 佑

医療の原点とは何でしょうか。古代ギリシャのヒポクラテス以前の医療は、医神アスクレピオスへの信仰を中心とした魔術的なものでした。まだ病態の解明が進まない時代に目で見えない病気への恐れから、神への祈りを捧げることで治癒を狙ったわけです。現在は、様々な疾患の病態理解が進み、多くの医療機器も進歩しました。そこには可視化という大きなテーマがあったと考えます。学生の頃を思い返せば、様々な生体分子、例えば7回膜貫通タンパクをリボンモデルで可視化して頂くことで、なんとか理解を深めて進級ができたように思います。医療の現場においても、単純X線写真に始まり、身体の断層撮影から立体構造への再構成、各分野での内視鏡の発達など、見えないものを見えるようにすることを柱に様々な技術革新が行われて

きました。

さて、皮膚科において内視鏡はありません。当然ですが、それは皮膚の病変は肉眼的に確認できるからです。目で見える病変に対して治療手段を講じ、さらに目で見て治療効果を判定できる、非常にわかりやすい医療と言えるかもしれません。若輩者の私には想像もつきませんが、その皮膚を見る目を究めた先生方は、皮膚の性状から非常に多くの情報を得て鑑別診断を進める事ができます。正確に皮膚の状態を記していく記載皮膚科学という分野が発達してきたことも理解に難くないところです。皮膚をチラ見からの、梅の木をかまっただね？、椎茸食べましたね？、あなた豆類が好きでしょう？。そんな眼力を鍛えていきたいと、そう思うのです。

このように目で見ることから発達してきた皮膚科も時代の流れを受けて、目に見えにくい病態機序を抱える多くの疾患を診察するようになってきています。シャーロックホームズのような洞察眼を兼ね備えて、時代のニーズにも応えられるそんな皮膚科医になれたらと思いつつ日々を送っています。

(東海大平22年卒)

私がなぜ現在の科目を選んだか

「放射線科」

信州大学医学部画像医学教室

小沢 岳 澄

高校の同級会で、互いの職業の話になり、何科の医師かと問われたので「放射線科」と答えると、ほぼ確実に「何をしているの？」と聞かれる、そんな医療関係者以外には馴染みの薄い、名前からイメージが湧きにくい科を私が選んだ経緯について、学生時代を思い出しながら書かせていただきます。

放射線科には、画像診断・核医学・IVRを専門とする放射線診断専門医と、放射線治療を専門とする放射線治療専門医があり、現在私は後者を目指した専門研修の最中です。いくつもの選択を繰り返した上で現在がある訳ですが、職業柄楽しいとは言えないものを責任を持って積極的に行っていく為に、自分がやりがいを見出せるかと長く続けていけるかということも意識していたように思います。

大学入学当初は、内科系で何かしらがん治療に関わるという漠然とした目標は持っていましたが、具体的な科などは考えていませんでした。色々な授業で診断

などに用いられる画像に興味を持ち、大きな声では言えませんが試験対策で科毎に分担を決める慣わしがありましたので放射線科を担当し、当時5年生で行われた臨床実習で各科を回る中で概ね放射線科に決められました。更に初期研修で放射線科や他科の研修をした上で、当初の目標などもあり、現在に至ります。

現在の私の主な業務は外来と放射線治療計画、小線源治療の手技・処置などですが、放射線治療の対象となる疾患は多岐にわたり、各々のガイドラインや治療方法など日々勉強中です。また、放射線治療が高精度化するのに伴い、治療計画もより精密・正確さを求められるようになり、画像所見の判断や輪郭入力など、上級医とも議論・検討しながら計画しています。知識を最大限に動員し判断や説明をする初診外来から、実際の治療計画を作り上げ、その治療による変化を診察する再診外来まで、私のような立場でも全ての過程に関わりながら研鑽をつめることが、人手不足の象徴でもあります。やりがいにもなっています。他科の方々にご迷惑をおかけすることも間々ありますが、長野県内全体で10名程しかいない放射線治療専門医の一翼を早く担えるように、努力していきたいと思っています。

(信大平20年卒)